

# 認知語用論と敬意表現

—「どうぞ」発話と「どうか」発話の場合\*—

武内道子

ことばによるやりとりにおいて、敬意はどこから来るかという問いに対して、当然、言語表現を用いることによってという返答になろう。表現の選択、あるいは発話のスタイルは、話し手が聞き手との社会的関係を考慮して行う。ここに生じる効果ということになろう。聞き手の側からすれば、話し手の示した敬意を読みとることによって、話し手のポライトネスとして受容すると考える。

本稿では、認知語用論としての関連性理論が構築する発話解釈モデルを用いて、すなわち関連性に基づく発話解釈の観点から、日本語の敬意・ポライトネスを考えるものである。意図伝達性の概念という観点から考察し、話し手がその伝達を意図したときにのみ、聞き手が発話解釈の一部として復元するという考え方を提示したい。具体的には、「どうぞ」と「どうか」の使用が、どのように話し手の敬意伝達を復元させるか、すなわち、聞き手上位であることを話し手が認識し、それを伝達することを意図していることを明示する言語表現であることを提示する。さらに、発話行為におけるやりとりとして考えるとき、両者の差異は許可、助言、提案対要請、依頼、懇願の区別を明示する働きにあると分析する。いずれを意図しているのかを聞き手の推論にのみ任せるのではなく、話し手が指示し、よって聞き手への敬意を表示していると分析する。

## 1. 関連性理論

### 1-1 意図明示的推論的伝達と解釈

関連性理論は、Sperber & Wilson (1986/1995) によって開発された情報授受を支配している原理原則である。とりわけ、発話解釈に関する語用論モデルとして発展してきた。発話理解は話し手の意図を推論的に探ることなくしてありえないと初めて言ったのは Grice (1975) である。発話の背後にある話し手の意図がどのように理解されるのかという問いが取り上げられてきたのはごく最近のことであるといえよう。関連性理論は、Grice の意図推論的発話理解の主張を認知的に妥当な語用論理論として発展させようとした試みである。

情報授受の中で、関連性理論は偶然的でなく、意図的な情報伝播、しかも意図明示的行為を考察の対象とする。すなわち、話し手と聞き手の間に情報伝播が行われているという相互的認識、伝達意図の理解が伝達には不可欠である。関連性理論は伝達を狭くとらえ、関連性の原理はこの伝達の領域で作動するものと提示している。

伝達を可能にするのに必須のものは人の心を読む能力である。人は何かを伝達しようとするとき、その概念内容を心に表示する。そしてその情報を相手に知らせたいという意図を持っている。さらにその意図を持っているということを相手に知らせたいという意図をも持っている。前者を情報意図、後者を伝達意図と呼ぶ。二つの意図が話し手側から提示され、聞き手が推論によって双方の意図を認知することによってコミュニケーションは成立するというのが関連性理論の考えるコミュニケーションの形態で

ある。加えて、人間は意図についてそれが誰かのものであるという判断もできるし、他人の信念についての信念を形作り、認識するという複雑な能力を持っている。そしてそれを言語形式に表示する手立ても豊かである (Wilson 2000 参照)。

発話を意図明示的行為としてとらえ、コミュニケーションの原理はこの情報授受の領域で作動する原理であり、語用論のゴールは、話し手の伝達しようと意図した情報を、いかに聞き手が認識するかを説明することである。この枠組みにおいて発話とは伝達する情報を処理する労力を聞き手に要求すると考える。一方、聞き手の発話理解は伝達される情報処理にかかる労力を提供するという理解に基づく。そして聞き手の情報処理労力はそれなりの見返り (認知効果) の期待を伴うものである。つまり無償で手に入るものではないということである。その労力と見返りを「関連性」という概念でとらえることができる。

### 関連性の原理

すべての発話は関連性の期待を伝達する。

### 関連性の期待

- (i) 発話 (情報内容) は少なくともそれを処理するのに必要とされる労力に値するものである。
- (ii) 発話 (情報内容) は話し手の好み・選択と能力に応じて、聞き手にとってもっとも関連性の高いものである。

情報の関連性は、それを処理するのにかかる労力と、情報が聞き手の認知環境にもたらす変化・改善 (認知効果) によって決定される。上記関連性の期待 (i) は認知効果の下限を定め、(ii) は上限を定めている。話し手は知らない場合もあるし、言いたくない、教えたくないということもある。聞き手にとっての処理労力に関しては、少なければ少ないほど、関連性は高くなる。認知環境の変化 (認知効果) は、その程度が大きければ大きいほど関連性が高くなる。

認知効果は聞き手のすでに持っている情報と相互作用したときに、その既知情報に何らかの変化をもたらしたものと定義する。情報の関連性は以下の3種を区別する。

### 新情報が関連性を有する場合

- (i) 強化：あやふやだった既存の情報を強める。
- (ii) 矛盾と削除：既存の想定と矛盾し、したがってそれを削除する。
- (iii) 文脈含意：新情報と既存情報の結びつきによってのみ導き出される結論。

たとえば、同僚が時折話の中で関西弁アクセントになるので、ひょっとしたら関西出身かも知れないと思っていたとして、あるときその人が「私の父は姫路城のお膝元で生まれ育ち」と聞いたとき、もしかしたらという想定が確実なものになる。あるいは、私がこの時間主人がもう帰っているだろうと駅からの道を急いでいる時、お隣の奥さんから「ベルを押しても誰も出なかったので、回覧板をドアの外においてきました」と言われたら、その情報は既存の想定を弱めることになり、さらには破棄することになるかもしれない。もっとも典型的に関連性があるのは、たとえば、講演に行こうとしている大学へは駅からスクールバスで行けばいいと思っていた (既知情報) が、会場がバス降り場から近いかわからなかったので尋ねたら、近くないという返事であった (新情報) ので、駅からタクシーで行こうと決めた (文脈含意) というような場合である。

## 1-2 発話の言語的情報と話し手の意図した命題内容

聞き手は、関連性の期待に導かれて、話し手の意図した解釈を推論的に探り、話し手の伝えようと意図したいくつかの命題を推論的に導き出す。話し手の伝えようと意図した命題内容を、関連性理論は表意と推意という二つに区別する。発せられた言語形式を下敷きにして推論の結果得られるものと、純粹に推論のみによって得られるものの二つである。そこで、発話解釈には3つのステージが区別されることになる。

### 発話の3ステージ

- (i) 論理形式 (logical form) : 言語情報の解読 (decoding) のアウトプット
- (ii) 表意 (explicature) の構築
- (iii) 推意 (implicature) の構築

関連性理論の基本的な主張は、意図明示的推論的コミュニケーションにおいて、発話そのものが持つ意味は話し手の伝えようと意図した思考内容を聞き手に伝達する手がかりにすぎないということである。論理形式は、発話解釈の最初のプロセスである記号解読のアウトプットであり、語用論へのインプットとなる。論理形式に語用論的作業が加えられ、話し手が伝達しようとした意味に近づく過程を(1)のやりとりによって概略してみる。

- (1) 妻：お茶にする？  
夫：(テーブルにある饅頭を指差して) これは日本茶だね。
- (2) a. テーブルにある饅頭を食べるには日本茶が合う。  
b. テーブルにある饅頭を食べるには日本茶が合うと夫は言った。  
c. 饅頭を食べるには(紅茶でなく)日本茶がよく合う。  
d. 夫はテーブルにある饅頭を食べたい。  
e. 夫は妻に日本茶を入れてもらいたい。  
f. 妻は日本茶を入れるのがうまい。

表意は、言語情報の持つ論理形式を、あいまい性、不完全性を推論によって取り除き((3a)において、「土曜日に」発つのか、言ったのか)、省略されている要素を補い((3b)において「寿司を注文した」と補う)、代名詞や指示詞の対象を同定する((3c))。あるいは(3d)や(3e)に見られるような意味拡充、すなわち[ ]内に示される、言語情報にない要素を補うという作業を行うことによって得られる(Carston 2002)。

- (3) a. 彼は土曜日にスコットランドへ向けて発つと言った。  
b. 父はうなぎを注文した。僕は寿司にした。  
c. (改札口で)これはこれ[パスモ]用で、それ[切符]はダメです。  
d. (新聞のテレビ欄を見て)今日は何もないな。[見たい番組が何もない]  
e. 花子が太郎に鍵を渡して、[花子が渡した花子の鍵を使って]太郎がドアを開けた。

(1)の夫の発話については、(2a)と(2b)が表意であり、(2c) - (2f)が推意である。このうち、(2c)は、(2d)と(2e)を結論として導くための前提として聞き手がコンテキストから呼び出す想定であり、

一方 (2f) は必ずしも話し手の意図したものというわけではないが、ひょっとして聞き手が復元するかもしれない想定である。さらに、発話行為や発話態度の記述も含まれ、これは (2b) のように (2a) の基礎表意を埋め込む高次表意のレベルで表示されると考えられている。

### 1-3 手続き的情報

一方、発話のもつ言語情報の中には、意図した命題内容そのものにかかわらない情報がある。次の (4) の下線の語を考えてみよう。

- (4) a. いくら賢いといっても、やっぱり子どもは子どもだ。  
b. 窓ガラスを割ったのはどうも家の健太らしいの。  
c. どうせ二人は枯れすすき、花の咲かない枯れすすき。  
d. 山田さんは大阪出身だ。でも標準語をしゃべるのよ。  
e. 山田さんは大阪出身だ。それで標準語をしゃべるのよ。

これらの語 (言語形式) は意図した命題内容にかかわらない。つまり、命題の真理条件を左右しない。これらは先行する発話の事象と後続発話の事象間の発話の処理の方向を聞き手に指示するという機能を有し、そのことによって発話解釈の処理労力を軽減することに貢献していると考えられる。関連性理論ではこのような言語情報を「手続き的情報」として特徴付ける。これらの情報が伝達される命題内容に何らかの影響を与えるとすれば、話し手が意図的に聞き手の注目を喚起したいとして使用したと考える。すなわち、解釈の方向をポイントし、よって認知効果のありかを教えるという操作を話し手が試みているのである。以下で「どうぞ」と「どうか」が手続きを記号化していることを例証し、手続きを記号化しているとはどういうことかを考察する。

## 2. 「どうぞ」と「どうか」一聞き手上位のポインター

人間の認知に発話解釈仮説の基盤を置く関連性理論が敬意の表明をどう説明するかについて具体的に見ていく。すでに述べたように関連性理論の基本的考え方は、話し手はその伝達を意図したときのみ、発話解釈の一部として聞き手が復元するというものである。関連性理論は推論によって話し手の意図を探ることなくして、発話解釈はありえないと考えている。推論的コミュニケーションにおいて関連性への期待が生じ、関連性への期待は、なるべく処理労力を少なくしながら、認知効果をもたらす解釈を選択するよう聞き手を導くというものである。話し手は、この方向で自動的に瞬時に、形式の選択を行いながら、よって発話の推論的解釈に制約を課すことになる。このとき話し手が聞き手への敬意を表明しようと意図したのであれば、その意図を言語形式に載せることによって明示する。「どうぞ」と「どうか」はこの線に沿うものである。その発話解釈プロセスをたどることによって、日本語の敬意表示の仕方的一端を提示したい。

話し手の言語形式の選択の中に、(4) のような命題内容に反映されない情報をもつ語がある。聞き手が心にも留めない言語情報が実際の発話の中には多く含まれている。命題内容にかかわらないのであるが、話し手は選んで発したのであるから、それによって伝達しようと意図したことがあるはずである。しかも、一見処理労力を増すとおもわれるのに、である。そして、結論を先に言ってしまうと、これら言語形式は、実は発話の処理労力を減じることに貢献している、したがって関連性を高めることに貢献しているのである。そのような情報が伝達される命題内容に影響を与えるとすれば、話し手が意図的に聞き手の解釈に何らかの注目を喚起したいともくろんで、その形式を使用したのである。では、「どう

ぞ」と「どうか」の使用によって話し手が喚起しようと意図したことは何か。一般に言われるように、文の意味に丁寧さを加えるのであれば、発話として話し手の敬意を意図したものになるといえよう。当該の発話解釈にあたって、話し手は敬意をいかにして伝達することになるのか。さらには「どうぞ・どうか」が記号として有している意味は何であるといったらよいか、以下において考察していきたい。

## 2-1 命じ発話の関連性

「どうぞP」「どうかP」において、Pに起こる文タイプは極めて限られていることは周知のことである。いわゆる命令文と呼ばれるものに限られる。したがって「どうぞ・どうか」の意味の考察は命じ発話のそれと不可分である。まず関連性理論の命じ発話の分析を紹介することからはじめる。

- (5) Leave the room immediately.
- (6) The hearer leave (s) the room immediately.
- (7) The speaker is requesting the hearer to leave the room.

(5)の命題形式は(6)である。すなわち、命令法による文の発話命題は言述発話の命題と同じである。発話行為理論の枠組みでは(5)に示される命令法の用法は、行為指示型の発話行為の遂行と関係付けられる。すなわち、命令、要請、依頼、嘆願、忠告、助言といった行為の遂行である。これらの行為は聞き手に何かをさせようとする試みであると定義され、これらの間の違いは強さの違いと見る。発話行為理論によれば、聞き手は話し手が遂行を意図した発話行為のタイプを同定しない限り、発話を理解したとはいえないとする。つまり、(5)について聞き手は(7)のような行為指示記述を復元しなければならない。発話行為理論は、すべての発話を発話行為のあるタイプに割り振ることが伝達内容の一部であるという前提をもっている。一方、関連性理論では(5)のような発話の理解は必ずしも(7)のような発話行為の記述の復元が関与していないとする。

発話の関連性を確立するためには、聞き手は発話が言述(saying)の例か、尋ね(asking)の例か、命じ(telling)の例かを判断しなければならないことは確かであるが、このことは発話行為の記述を復元しなければならないことを意味するのではない。命じとして意図された発話の話し手が、聞き手に何かをさせようとして意図していたとは限らないのである。次の一連の例を見てみよう(Blakemore 1992, Wilson & Sperber 1988 参照)。

- (8) Ruin the carpet.
- (9) A: What did Jane say?  
B: Vote Democratic Party.
- (10) Reach the star.
- (11) A: Excuse me, I want to get to the station.  
B: Take a number 3 bus.
- (12) Recipe for the white souce:  
Melt two ounces of butter in a saucepan. Add four tablespoons of flour, and then gradually pour in eight fluidounces of warmed milk, stirring continuously....
- (13) A: Can I open the window?  
B: Oh, open it, then.
- (14) Get well soon.

- (15) Please don't rain.  
 (16) (いやいや謝りに行く道すがら) Please be out.

(8) - (10) は話し手自身の、その命題が真であるという態度の表出ではない。これらの発話は命じ発話の例であると同定されるが、話し手は聞き手に何かをさせることを試みているとは解釈されない。一方(11) - (16) は、表出命題が字義通り表示されているが、聞き手に何か行為を指示する試みとして理解されない命じ発話の例である。

一方、命じ発話と解釈される文タイプは命令文だけではない。

- (17) a. You are to leave tomorrow.  
 b. The battery's gone flat.  
 c. Can you pass me the salt?

統語上の文タイプが互いに排他的で、その発話行為のタイプは明確に規定されているという主張は維持できないことは明らかである。明確に規定された統語上の文タイプは、表面上の言語的方策であって、発話行為のタイプと体系的な相関関係があるとは断定できない。イントネーションや倒置の語順はいろいろな方法で解釈過程を導く標識に過ぎないと関連整理論は分析する。たとえば、(17) は、その命題 P が普通は The speaker said that P という断定文に解釈する明示的指標であるということである。同様に、命令法の使用は、telling that P を導く言語上の明示的マーカーである。明示的マーカーがない場合は、たとえば(17b) では、話し手が P と断定しているのか、発話行為のどれかを遂行しようとしているのかを決定するのは聞き手次第なのである。

命題は現実世界の記述として、あるいは別の可能世界の記述として心に抱かれうる。同時に命題は、潜在世界における事象として、さらに願望世界における事象として抱かれうる。関連性理論によれば、(5) の発話の表出命題は(6) であるが、これは命じ発話の表意ではない。表意は伝達された想定である。ひとつのコンテキストにおいては、その発話は(18a) - (18c) に記述されるような高次表意を伝達することになる。

- (18) a. It is desirable to the speaker and it is potential that the hearer leave the room immediately.  
 b. The speaker requests the hearer to leave the room immediately,  
 c. The speaker wants the hearer to leave the room immediately.

命令文はその事象が潜在的(potential)でかつ望ましい(desirable)ものであるということ記述するのに使用されると主張する。命令法の持つこの意味が文脈想定と関連性の原理と相関し、(5) - (16) を含むあらゆる命じ発話を説明すると主張する。命令文は、その命題内容を復元し、話し手が聞き手に P せよと指示しているという形式であると分析し、さらに P せよと指示することは、P が解釈する思考が望ましい状況の記述であると思いついて描いていることを伝達する。この思考を望ましいと思いついて描くのは誰か、誰の観点からその状況が望ましいものと指示されているのか、聞き手は推論によって答えなければならない。すなわち、その不確立性(indeterminacy)は語用論上解決されるべきものである。

望ましさは3項関係である。XはYをZにとって望ましいと思う。話し手は事象Yが自分自身にとって望ましいことであると示す場合がある。同様に、聞き手にとって望ましいことであると示す場合がある。話し手が聞き手のいずれにとって望ましいのかを、聞き手は確定しなければならない。関連性の原理と一致する最初の解釈が選択される。正しく理解してほしいと思う話し手は、伝えようとしてい

る解釈が必ず関連性の原理と一致する最初のものであるようにしなければならない。

命じ・要請、依頼、聴衆のいない(15)と(16)では、話し手自身にとって望ましい事象を表示していると理解される。それらは解釈過程に持ち込まれる文脈想定により区別される。聞き手が記述される事象を引き起こす立場にあることが明らかであれば、その発話は要請(命じ)、依頼、懇願のいずれかとして理解される。要請は、依頼、懇願とは話し手と聞き手との社会的関係に関する文脈想定により区別される。命令文そのもの、たとえば(5)には「要請」と「依頼」の区別はなく、文脈における上下関係の情報によって決まる。もし話し手が聞き手より上位の立場にすることが明らかであれば、その発話は「命じ」として理解される、一方、逆の立場の情報があれば、「依頼」として理解される。また「依頼」と「懇願」の違いは、記述される事象の示す望ましさの程度の違いである。かくして、(5)の話し手が、聞き手が部屋を出て行くことが話し手にとって極端に望ましいことであると示していると理解されるならば、依頼しているというより懇願もしくは嘆願していると理解されよう。

「祈願」(例(14))は、まず話し手も聞き手も記述される事象を引き起こす立場にないと話し手が信じていること、次にこの事象が聞き手にとって望ましいことであると話し手が信じているということ、この二つが聞き手にとって明らかであるという事実により、要請、依頼、懇願と区別される。聴衆のいない命令文((15)と(16))の場合は、まず聞き手が存在していなくてよいという事実、および事象が話し手にとって望ましいという事実によって「祈願」と区別される。

事象が聞き手にとって望ましいということ、話し手が示していると聞き手が解釈する場合には、その発話は「許可」か「助言」として解釈される。(5)や(13)において立ち去ること、あるいは窓を開けることが聞き手にとって望ましいことであると認め、このことが可能であると保証していると、話し手が理解されればこの発話は「許可」として理解されよう。一方(11)Bは聞き手への助言として解釈される。

命令文そのものは、要請・依頼・懇願、許可・助言いずれの側の解釈にも関与しないことを述べた。命令文という文タイプの発話の意味解釈は、文脈想定と語用論上の原理とが相互作用して初めて得られるという関連性理論の主張を提示した。

## 2-2 データ

- (19) a. 先生、どうぞ/どうかお座りください。  
b. どうぞ/どうかユックリ静養なさってください。  
c. (大型ディスカウントショップのレジで、レジ前にある1円玉の入っている箱をさして)  
客：あと1円あればお札を崩さなくても済むのになあ。  
店員：どうぞ、ご自由にお使いください。  
          どうか、ご自由にお使いください。
- (20) a. \* どうぞ/\* どうか窓を開けなさい/開けよ。  
b. \* どうぞ/\* どうか出て行くな。  
c. \* どうぞ/\* どうか(やれるものなら)やっごらん!
- (21) a. A: 井田病院へ行くのはどのバスですか。  
      B: どうぞこのバスにお乗りください。  
b. A: 窓を開けてもいいですか、暑いんです。  
      B: どうぞ、暑いならお開けなさい。/どうぞ開けていいですよ。  
c. (ラジオのアナウンサー) 3曲続けてどうぞ。

d. (大きな荷物を持った人のためにドアを開けてあげて) どうぞ。

- (22) a. どうか、よろしくお引き立てのほどお願い申し上げます。  
b. どうか、わたしを一人にしないでください。怖いんです。  
c. どうか皆さん、平和憲法を守ろうとする人は社会党に入れてください。  
d. どうか、いませんように。／どうか、降らないで！

### 2-3 聞き手上位のポインター

命令文そのものが話し手と聞き手との間の上位関係に関与しないことは、(5) が要請とも、依頼・懇願とも解釈されるという直観を説明することになる。こう考えることによって、please と共起すれば「命令」ではなく、「依頼」として解釈されるという事実も納得がいく。すなわち、please が聞き手上位の文脈仮定を持ち、この情報が(5)の命令文に加わって、(5)'は「依頼」として解釈されるということである。

(5)' Please leave the room immediately.

(23) H > Sp

そこで、please は(23)に示される情報を記号化していると仮定する。「どうぞ」と「どうか」も(23)の情報を文に加えると考える。本論は、「どうぞ」と「どうか」は「聞き手上位」という情報を文脈に要求する、手続き的表現であると仮定する。このことを2-2の例を使用しながら検証する。

日本語においては、聞き手上位の状況で、いわゆる命令文「せよ」「しなさい」は容認されない。したがって、「どうぞ・どうか」も共起しない。日本語では、聞き手上位の状況で命令文発話が依頼の解釈にならない。逆に言えば、「せよ」「しなさい」という命令文は Sp>H という文脈想定が要請される。日本語の命令文は話し手上位の文脈想定を要求するとすれば、これが状況的想定である H>Sp と矛盾するため、(20)は容認不可となる。そこで「依頼」の際は別の言語形式、「窓を開けてください」が使用されることになる。日本語は英語と異なり、「命令」と「依頼」との区別が言語形式として明確になされているといえよう。

ドアをノックされた場合、相手との上下関係の予想が付かない状況では、(24b)のように命令文は使われない。

- (24) a. Come in.  
b. \*入れ/\*入りなさい。

日本語において、文脈に相手との関係の情報導入が不可避であるということが観察され、やりとりにおいて話し手と聞き手の間の上下関係が関与するということが言える。日本語の命令文は話し手上位を要求し、「どうぞ・どうか」は命令文と並び立たないという事実は、「どうぞ・どうか」が聞き手上位の情報を持つという仮説を支持することになる。

- (25) a. Please open the window.  
b. \*どうぞ/\*どうか窓を開けなさい。  
c. どうぞ窓を開けていいですよ。／どうか窓を開けてください。



(25a) は please のもつ聞き手上位の意味によって命令文を「依頼」にする機能があるが、話し手上位の情報要請はない。一方 (25b) の非容認性は文脈とは無関係に決定付けられる。(25c) において、「どうか」は「依頼」の意味情報を強化しているといえる。つまり「どうか」がなくても、「してください」の形式によって「依頼」の解釈を受けるからである。同様に「どうぞ」も、「あけなさい」より丁寧な形式「あけていいです」によって、「助言」「許可」の意味を強めているといえよう。

日本語の命令文は話し手上位のコンテキストでのみ使用される。そして「どうぞ・どうか」が共起しないということは (20) や (26) のような典型的な命令文の発話解釈を考えるとよくわかるであろう。

- (26) a. タバコはやめなさい。  
b. (植えたばかりの苗木に) 早く大きくなれ。  
c. まっすぐいきなさい、そして信号のところで右に曲がりなさい。

命令・要請発話は  $Sp > H$  であり、依頼発話は  $H > Sp$  である。この区別が日本語では言語形式によって明示されているのである。そもそも依頼発話は相手への敬意を直接示すものではない。したがって、この意味で「どうぞ」の使用は話し手の敬意の意図を付加することになり、明示的に敬意を強化すると考えられる。一方、相手に許可を与えること、相手にとって良かれという助言は、聞き手への敬意を示すことそのものである。依頼の形式「してください」に「どうか」を付すことによって相手への敬意が生じると考えられる。聞き手への敬意を明示的にポイントする表現が「どうぞ」と「どうか」である。

#### 2-4 「どうぞ」と「どうか」はどう違うか

「どうぞ」と「どうか」は共通の意味として、聞き手上位という意味を持っていることを論じた。次の問いは両者がどう違うかということである。私の結論は、望ましいとされる変数  $Z$  が聞き手側にあると分析される場合、つまり聞き手にとって望ましいことであると指示する言語表現が「どうぞ」であり、一方望ましい変数  $Z$  が話し手自身のものであるとき、すなわち話し手にとって望ましい事象であることを聞き手に明示的にポイントする手段として「どうか」の使用があるというものである。例文 (21) と (22) を見てみよう。

(21) の一連の例文で示されるように、「どうぞ」は聞き手にとって事象  $Y$  が望ましいと、話し手が考えているとき使用される。助言であり ((21a)), 許可 ((21b)) であり, (19a) (19b) の「どうぞ」の使用は祈願の解釈となり, (19c) の店員の「どうぞ」の使用は提案の解釈となる。いずれもそれに続く命題内容が聞き手にとって望ましいことを伝える。一方、「どうか」の使用は、話し手自身にとってその事象が望ましいことを伝え、したがって依頼、嘆願、懇願の解釈になる。したがって、(19a) と (19b) において、「どうか」が使用されると、先生が座ることが話し手である学生にとって望ましいこと、つまり座っていただかなければ私が困るといった解釈になろう。同様に、(19b) はゆっくり養生することが話し手にとって望ましいこと、たとえば、早くよくなってくれないと部下である私が困るといったことを伝えることになろう。(19c) の「どうか」の使用は使ってもらおうとうれしいということが話し手の意図であると解釈される。

この対照を典型的に示すのが (21c) と (21d) である。「どうか」は後続発話の命題内容  $P$  なしに使用されない。相手に頼むということは話し手の都合であるから、 $P$  を言わないで (非明示的に) 済ますことは許されないという社会的、文化的制約と関係していると考えられる。さらに、(22d) の聴衆のいない発話において、「どうぞ」が起こらないことは、「どうぞ」が聞き手側のものであることから自明である。つまりいない相手に向かって事象の望ましさを云々するものではない。(21b) に見られるように、

「お」を付けて「どうぞ」の使用が容認されることも、聞き手側のものであることを裏付けよう。すでに述べたように、「依頼」の意で命令文が使用されないのである。

ここで、非字義的命題発話について考えてみる。

- (27) a. どうぞ、カーペットを汚すといいわ。  
b. どうか、カーペットを汚してちょうだい。
- (28) A: 千鶴子はなんて言ってた？  
B: どうぞ／どうか、公明党に投票してだって。

(27) はいずれも表出命題の反対を伝達するアイロニー発話とすれば、(a) は聞き手への許可として、(b) は話し手側に立った依頼として解釈され、関連性の期待にかなう（最適関連性と一致する）解釈であれば、前者は許可なんてとんでもないことを、後者は汚さないでほしいことを伝達する。この場合も、「汚すといい」と「汚してください」という言語表現によって「許可」と「依頼」の区別が明示されている。「どうぞ」と「どうか」の使用はこのことを強化するよう指示しているのである。また、(28) B は、伝聞詞「って」によってその命題内容が千鶴子の言ったことであることを明示している。「どうぞ」「どうか」は、その事象がどちらの側にとって望ましいのかと考えているのは千鶴子であって、話し手のものではないと解釈される。

### 3. 手続きの記号化

「どうぞ」と「どうか」が記号としてもっている意味は何か、おおよその見当はついた。それらが記号化している意味は、意味タイプとして上記(4)で提示した形式と合い通じると考えられる。まず、命題内容そのものにかかわらない、つまり非真理条件的である。次のやりとりで、

- (29) A: どうぞ／どうか 今言ったことは忘れてください。  
B: そんなことおっしゃっても気になります。

代用表現「そんなこと」の内容としてはAの発話の「どうぞ・どうか」を除いた部分である。代用表現に含まれないということは、発話の命題内容に含まれないということであり、命題内容に関与しないものは真理条件的でないということである。「どうぞ／どうか」がなくても話し手の伝えようとしているメッセージは変わらないのである。とすれば次の問いは、ある言語表現が発話の命題内容に関与しないのであれば、その意味はどのようなタイプの意味を有しているといえるのか。

聞き手は当該の発話解釈に当たって正しいコンテキストを選択することが重要である。このコンテキスト選択を助けるために用いられるメカニズムがあると考えるのは当然である。コンテキストを間違えずに選択することによって、話し手の意図した解釈を復元し、したがって認知効果を得ることになるのである。ここにあるのは、話し手は、聞き手に対してその解釈に何らかの制約を課するという考えである。すなわち、聞き手の発話解釈に何らかの制約を課すことに特化している言語表現があつてしかるべきであり、その場合概念 (concept) でなく、手続き (procedure) を記号化しているという。関連性理論では、語が記号化できる情報として、概念的情報と手続き的情報の2タイプを区別する。概念的情報が、真理条件に貢献するのに対し、手続き的情報は、解釈の仮説を立てる手がかりを与えると考えられる。言語情報そのものが話し手の意味に程遠いことを考えれば、発話から話し手の思考を推測する際の手がかりがいかに有用であるかは明白であろう (Wilson 1993, 武内 2003a 参照)。

手続き的情報を記号化している語の例として最もよく知られているのは Blakemore が分析した談話連結語である (Blakemore 1986; 1992。日本語の分析については Matsui 2002, Takeuchi 1998; 2008, 武内 2003b; 2005 を参照)。Blakemore は、談話連結語 (discourse connective) がどのような認知効果が発話によって意図されているかを示唆すると提案し、たとえば、(30) の発話列において、

- (30) a. Peter is in town.  
b. Mary isn't here.
- (31) a. Peter is in town. So Mary isn't here.  
b. Peter is in town. After all Mary isn't here.  
c. Peter is in town. But Mary isn't here.

コンテキストによって 2 発話間の関係がいくつか考えられる。実際のやりとりでは、二つの発話の推論関係を明示的にしようとする。話し手は、so, after all, but のような談話連結語を用いて (30b) の解釈に制約を加えるであろう。(31a) の so は後続の発話を先行発話の結論として解釈するよう、(31b) の after all は後続の発話を前提として、先行発話をその結論として解釈するよう指示している。そして (31c) の but は先行発話から導き出された想定 (じゃ、Mary はここにいるのだ) が後続発話と矛盾すること、したがってこれを削除するよう指示していると分析する。これら談話連結語の言語表現はどのような認知効果が発話によって意図されているかを示唆する、すなわち解釈における推論方向にある一定の方向にし向けることによって、聞き手の処理労力を減じ、よって関連性を有するのである。

「どうぞ・どうか」も、それを含む発話解釈のコンテキストを探すのを助けるように働いているといえる。これが導入する命じ発話が聞き手上位のコンテキストであると話し手が想定している、ひいては (結果的に) 聞き手への敬意を表明するものとして話し手が意図している、ということを書き手に明示する形式なのである。両者の共通の意味は (23) に示される。これは聞き手の当該発話の解釈に制約を課し、聞き手上位のコンテキストをポイントし、その発話を、聞き手への敬意を表明したのものとして解釈するよう聞き手を導く働きといえよう。聞き手上位という情報を文脈に要請する手続き的意味を記号化している。

次に、「どうぞ」と「どうか」の意味はどう違うのか。違いもやはり手続き的タイプの情報にあると考える。その命題の記述する事象が、可能性がありかつ望ましいものであるという記述に加えて、聞き手、話し手のどちらにとって望ましいものであると、話し手が考えているかを聞き手にポイントする意味を有している。

関連性理論によれば、命令文形式の意味論は命題態度の表示である。それは、二つの基本的態度、その事象が潜在的であるという信念、および望ましい事象であるという信念からなる複合的な命題態度の表示である。したがって、(32) のような高次表意を構築するよう聞き手に意向ける手続き的制約を有していると分析される。

- (32) It is potential and desirable to either the speaker or the hearer that P

そこで、結論として、(33) に示される二つの手続き的意味を記号化していると主張したい。

- (33) どうぞ:  $H > Sp$  &  $Sp$  regards Y as desirable to H.  
 どうか:  $H > Sp$  &  $Sp$  regards Y as desirable to Sp

「どうぞ・どうか」は、まずその導入する発話解釈に当たって、聞き手上位というコンテキストを呼び出すよう、聞き手にポイントする意味を有する。次に、関連性の枠組みにおいて、命じ発話は事象が潜在的かつ願望的であるが、後者の願望的ということは、二つの場合が区別され、「どうぞ」と「どうか」はその区別を明示する。話し手が事象を聞き手にとって望ましいと思っているか、あるいは話し手自身にとって望ましいと思っているかである。聞き手上位の文脈想定のもと、「どうぞ」の使用は、その発話は命令口調とは反対のお願いするような助言あるいは提供となるし、一方「どうか」の使用はその発話を丁寧な依頼、時として懇願とするのである。その意味で「どうぞ」は相手を立てる尊敬語であり、「どうか」は謙譲語であるといつてよいかと思うし、両者は敬意表現であるといえる。ここでのポイントは、敬意とかポライトネスという概念は関連性の期待を満足させる解釈を求める中で副産物的に生じるものであると関連性理論は分析するということである。

「どうぞ」「どうか」がなくても、コンテキスト情報と推論のみで、聞き手は、話し手の意図、つまり、上下関係と望ましいのはどちらかを復元するであろうが、「間違いがあってはならない」「ひょっとして」「念には念を」の思いが話し手にいずれかを選ばせるのである。「どうぞ・どうか」発話の解釈を話し手の意図した方向に間違いなく解釈するよう、聞き手を導く言語形式である。ポインターとしての機能を有するということである。Please が単に聞き手上位という手続き的情報を記号化しているのと対照的に、「どうぞ」「どうか」は二つの手続きの意味を記号化している。このことを見ても日本語は語用論的に豊かな言語であると主張してもいいかと思う。

#### 4. 結び

日本語の敬意表現の記号化されたケースとして「どうぞ」発話と「どうか」発話を意図明示的伝達概念で考察し、敬意ひいてはポライトネスを話し手が意図した解釈の一部としてとらえるよう聞き手にポイントしている言語形式であると論じてきた。「どうぞ」と「どうか」は共通の意味として、当該の発話解釈に当たって、聞き手上位という文脈想定を呼び出させ、一方両者の違いは、記述される事象が聞き手、話し手いずれにとって望ましいと話し手が考えているのかを聞き手に指示していると分析した。

関連性理論は人間の認知に仮説の基盤を置いている。関連性理論の提唱する推論的コミュニケーション、すなわち推論によって話し手の意図した解釈を見出すという過程は関連性への期待を生じせしめる。関連性への期待は、処理労力をできるだけ抑えながら認知効果をもたらす解釈を選択するように聞き手を導くので、聞き手の発話の推論的側面に制約を課すことになる。発話解釈は瞬時的、無意識的なものであるから、そこに何らかの制約が必要であることは明らかである。コミュニケーションは、話し手が情報伝達の意図を持っている事実が確認されたら、その情報の持つ効果を探っていこうとする。社会的人間関係のやりとりのレベルでとらえられる敬意・ポライトネスであれば、意図伝達の認識ができて初めて理解されるものであると思われる。敬意表現を社会的約束ごととしての研究・考察から、意図的伝達行為のメカニズムの中で、人間の認知活動の一環としてとらえることによってより深い考察が可能になると思われる。

キーワード：敬意表現、関連性理論、意図明示的伝達、命じ発話、手続き的情報

\* 本稿は 2009 年 10 月 24 日、早稲田大学で開催された「待遇コミュニケーション学会 2009 年度秋季大会」での講演に負っている。加筆、修正を施して論文としたものである。

## 参考文献

- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances-An Introduction to Pragmatics*. 武内道子 山崎英一 (訳) 1994. 『ひとは発話をどう理解するか—関連性理論入門』東京, ひつじ書房.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell. 内田聖二ほか (訳) 2008. 『思考と発話 明示的伝達の語用論』研究社.
- Grice, P. 1975. Logic and conversation. In Cole, P, & J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. 41-58. Academic Press, New York.
- Matsui, T. 2002. DAKARA as a marker of interpretive representations. *Journal of Pragmatics*. 34 867-891.
- Sperber, D. & D. Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. 内田聖二ほか (訳) 『関連性理論 伝達と認知』1999. 研究社出版.
- Takeuchi, M. 1998. Cause-consequence particles in Japanese. In Rouchota, V. & A. Jucker (eds.) *Current Issues in Relevance Theory*. 81-103. John Benjamins.
- 武内道子. 2003a, 「関連性理論の意味論」『英語青年』1847号 638-639. (2003年1月号 38-39)
- 武内道子. 2003b, 「手続きの記号化—『やはり・やっぱり』の場合」『語用論研究』第5号 .73-84.
- 武内道子. 2005, 「関連性への意味論的制約—「しょせん」と「どうせ」をめぐって」武内道子 (編) 『副詞的表現をめぐって—対照研究』63-87. ひつじ書房.
- Takeuchi, M. 2008. Concessives in Japanese: DEMO and KEDO in utterance-initial use. In Takeuchi, M. (ed.) *Individual Languages and Language Universals*. Special Issue of *Kanagawa University Studies in Languages*. (『神奈川大学言語研究』) 171-195.
- Wilson, D. 2000. Metarepresentation in linguistic communication. In Sperber, D. (ed.) *Metarepresentation*. 411-448. Oxford University Press.
- Wilson, D. & D. Sperber. 1988. Mood and the analysis of non-declarative sentences. In Dancy, J., J. M. E. Moravcsik and C.C. W. Taylor (eds.) *Human Agency: Language, Duty, and Value*. 77-101. Stanford University Press.
- Wilson, D. & D. Sperber. 1993. Linguistic form and relevance. *Ligua* 90, 1/2. 1-25.

## Cognitive Pragmatics and ‘Keii’ Expression :

### The Case of DOOZO and DOOKA

#### Abstract

This paper examines ‘Keii’ expression (respect toward the hearer) in Japanese. Looking in detail at DOOZO and DOOKA ‘please’ utterances, I explore how the speaker expresses her respect toward the hearer, who recognizes the speaker’s intention as politeness toward himself. In my view, the relevance-theoretic notion of ostensive-inferential communication makes an adequate explanatory framework: Keii/politeness can be communicated only when the speaker chose one or the other of the linguistic forms to intend and the hearer recognized by inference.

My claim is that both adverbs encode in common procedural constraints as encouraging the hearer to con-

struct higher-level explicature, accessing contextual assumptions about the relationship regarding the hearer's 'prior' position to the speaker (H > Sp). The adverbs differ in indications about the way that the state of affairs described is to be regarded as desirable from either point of view, the hearer's or the speaker's: in using DOOZO, the speaker regards it as desirable to the hearer and expects the hearer to interpret the utterance as 'advice' or 'permission', whereas in using DOOKA, the speaker regards it desirable to the speaker herself and to interpret the utterance as 'order', 'request' or 'plea'. In conclusion, Keii or politeness is best treated from a cognitive point of view and comes from search for expectation of relevance as by-product in the process of interpretation.